

---

# 小島道裕先生を送る

田中大喜

---

小島道裕先生が国立歴史民俗博物館（以下、歴博）に着任されたのは、歴博の開館7年目にあたる1989年4月のことである。当時は、1983年に総合展示第1室（古代）・第2室（中世）の2つの展示室で開館したのち、第3室（近世）・第4室（民俗）もオープンして開館メンバーによる仕事も一段落したところで、新たに助手を採用して組織としての陣容を整えつつあった時期にあたる。つまり、先生は歴博「第二世代」の研究者となる。以来、33年の長きにわたり、歴博において調査研究・展示・教育活動に従事されてきた。筆者は2014年4月に着任したため、先生と仕事をご一緒できた期間はただか8年間である。しかし、短い期間であったものの、特に先生の博物館・展示に対する豊かな経験に裏打ちされたお考えを折に触れて拝聴できたことは、それまで展示経験がなかった筆者にとって貴重な「学びの場」となった。先生から学ぶべきことがまだまだあるなか、先生をお送りすることは大変心残りだが、先生の歴博でのご経歴と歴博で取り組まれたご業績を振り返ることで、先生への送別の辞としたい。

神奈川県横浜市ご出身の先生は、1980年3月に京都大学文学部史学科を卒業され、1985年3月に同大学大学院文学研究科博士課程を単位取得退学された。そして、同年4月の同大学研修員、1986年6月の同大学文学部助手への就任を経て、1989年4月に歴博歴史研究部助手に着任された。

着任時の先生の研究テーマは、戦国～織豊期の城下町研究であった。着任前の1984年1月に『日本史研究』に発表された先生の処女論文「戦国期城下町の構造」では、戦国期の城下町の特質について、大名の居館を中心に家臣団・直属商工業者の屋敷からなる政治的軍事的集落域と、地域の流通経済の中心となる市場（都市）域とが空間的にもわかれて存在する二元的な構造と把握する見解を打ち出された。この見解は、いまもなお戦国期城下町論の到達点の位置を占め、戦国期の城下町の様相を追究するうえで参照すべき必須の先行研究となっている。先生は歴博に着任されると、この研究成果を学際研究として深化させる方向で戦国～織豊期の「都市」に関する研究に取り組まれた。すなわち、当時、考古研究部に在籍されていた千田嘉博氏をはじめとする考古学研究者と連携して、各地の戦国期の城下町・城館遺跡の調査を進められたのである。これ以前から先生は、ご自身の主要な研究フィールドとされていた滋賀県域の城館遺跡の調査を進められており、このご経験がこのときの調査に大いに発揮されたことは容易に想像される。城館遺跡の調査には、いまに残る地名や近世・近代に描かれた絵図の活用が欠かせないが、こうした歴史地理学的な研究手法の駆使は先生の城下町研究の大きな特色となっている。

着任以来取り組まれた戦国～織豊期の「都市」に関する学際研究の成果は、2000年の企画展示「天下統一と城」に結実した。また、この学際研究の一環として実施された青森県十三湊遺跡の調査研

---

究は全国的な話題となったが、ここでの成果は1998年に第2展示室の一部を暫定改善した際に、「東国と西国」のテーマを流通によって両者が結びつけられているという新たなコンセプトに変更する形で反映された。そして、ご自身の城下町研究としては、楽市令を都市遺構の分析と合わせて解釈され、中世末期～近世初期の城下町の建設にともなう優遇政策・時限立法として位置づける見解を公表された。さらに、楽市令が書かれた媒体にも着目され、現在第2展示室に複製がある織田信長の岐阜楽市令について、それが木の制札として出されたことの意味なども考察された。この研究は、古文書をモノとしての側面から捉える、新たな古文書学の一つの方向性を体現されたものであり、2010年代から精力的に取り組まれた先生の古文書研究の端緒となった。以上のご自身の城下町研究の成果については、『戦国・織豊期の都市と地域』（青史出版、2005年11月）として体系化され、これにより2006年7月に京都大学から博士（文学）の学位を取得された。

1994年4月に歴博歴史研究部助教授に昇進されていた先生は、博士号取得の2年後の2008年4月に歴博研究部教授に昇進された。また、同時に総合研究大学院大学（以下、総研大）文化科学研究科日本歴史研究専攻の専攻長に就任された。そして、2011年4月には歴博博物館資源センター長を歴任され、歴博組織の中心メンバーの一人として重責を担われた。

この時期の先生の主要研究テーマは、歴博が所蔵する代表的な資料の一つである洛中洛外図屏風、特に現存最古の「歴博甲本」とその周辺の16世紀を中心とする風俗画の研究であった。先生はこれらの絵画資料を歴史的な観点から分析し、「歴博甲本」については斬新な見解を公表され、学界の注目を集めた。すなわち、「歴博甲本」に描かれた幕府は第12代將軍足利義晴のために作られた「柳御所」であることを明らかにし、このことから「歴博甲本」の発注者は義晴の擁立とその建設を主導した管領細川高国と指摘され、画中には高国に関する人物が描かれている、という見解を公表されたのである。また、同様に画中に描かれた事物の観察から、ほかの洛中洛外図屏風類についても制作の年代や歴史的背景について考察を進められた。そして、これらの研究成果をもとに、近世までの洛中洛外図屏風類の全体を見通した『洛中洛外図屏風一つくられたく京都>を読み解く一』（吉川弘文館、2016年4月）を上梓され、その全容を示されたのである。

この間、絵画資料の復元にも取り組まれ、「歴博甲本」については科学研究費補助金基盤研究(B)「洛中洛外図屏風歴博甲本の総合的研究」(2009～11年度)によって復元屏風を制作された。また、愛知県立芸術大学による「月次祭礼図屏風」模本の復元画制作にも参加され、復元画による考察をもとに、これを15世紀前半の足利義持の時代の幕府などを描いた絵画とする新説を公表され、美術史や絵画技法研究との連携に成果を上げられた。以上の研究成果は、美術史や国文学の研究者と連携して、企画展示「西のみやこ 東のみやこ―描かれた中・近世都市―」(2007年)・「都市を描く―京都と江戸―」(国文学研究資料館との連携展示、2012年)に結実した。

2010年代からは、絵画資料研究とともに古文書研究にも精力的に取り組まれた。前述したように、古文書研究に取り組まれる端緒となったのは織田信長の岐阜楽市令制札への着目に始まった制札研究である。ここで先生は、全国の制札の事例を網羅的に収集・検討され、制札の縦横比が東国と西国とで違うことを発見し、さらに室町幕府の書札礼との関係で発給主体の大名を性格づけられることを示された。この研究において先生は、資料のモノとしての側面を観察することで見出され

る違いから、資料の本質的な意味を考察していくという、博物館的ともいえる史料学的な研究手法を駆使されたが、この研究手法を戦国大名の印判状研究にも導入することで、新たな課題を浮き彫りにすることに成功した。すなわち、印判状の朱印の押印位置が日付の下か、日付の上かという区別のあることに着目された先生は、後者が東国の北条氏流であるとともに、「東アジア標準」の押印方法と共通することを指摘し、その歴史的背景の解明が比較古文書研究の課題であることを示されたのである。また、「東アジア標準」という指摘からうかがえるように、先生は中世文書の特質を国際比較の視点から究明する必要性を訴えられた点も特筆される。以上の古文書研究の成果は、企画展示「中世の古文書—機能と形—」(2013年)・「日本の中世文書—機能と形と国際比較—」(2018年)として結実した。

このほかに先生は、展示と資料を活用した博物館教育にも尽力された。1998年5月から翌年3月にかけて、在外研究員としてイギリスの博物館について調査されたことが大きなきっかけとなったようだが、現地で学ばれたワークシートなどの教育プログラムを歴博において実践されたほか、文化庁の歴史民俗博物館研修や総研大の集中講義などでそれを普及するための演習も行われた。また、科学研究費補助金基盤研究B(2)「生涯学習時代における博物館教育・教育員養成および歴史展示に関する総合的研究」(2000～03年度)を主宰されて歴史展示そのものの意味についても研究され、その成果を『歴史展示とは何か—歴博フォーラム「歴史系博物館の現在・未来」—』(アム・プロモーション, 2003年11月)・『歴史展示のメッセージ』(アム・プロモーション, 2004年12月)などとして公表された。

加えて、デジタル化の進展に対応して、デジタルコンテンツの制作を精力的に進められたことも特筆される。「館蔵中世古文書データベース」・「古代中世都市生活史(物価)データベース」・「中世札データデータベース」・「中世地方都市データベース」を情報資料研究系の教員とともに制作されたほか、資料画像の公開も行われた。洛中洛外図屏風類の高精細デジタル画像を歴博HPの「WEBギャラリー」に公開するとともに、描かれた人物一人一人の画像をデータベース化した「洛中洛外図屏風歴博甲本・乙本人物データベース」を制作された。

また、「日本の中世文書WEB」では、古文書の音読をカラオケ表示で示すというユニークなコンテンツを制作され、大学の専門課程以外では学ぶことが難しかった中世文書の読み方の学習を広く公開された。なお、これらのデジタル技術による資料の公開と活用には、複製品(レプリカ)の制作経験にもとづいて、資料の持つ情報の一部を再現することの意味を積極的に位置づけた論文「博物館とレプリカ資料」(『国立歴史民俗博物館研究報告』50集, 1993年2月)が、その理論的背景としての役割を果たしていることを付言しておきたい。

以上のように先生は、33年間のご活躍を通じて、歴博の調査研究・展示・教育活動に多大な貢献を果たされてきた。また、研究テーマとされた城下町研究・絵画資料研究・古文書研究についても、それぞれに斬新な切り口から注目すべき成果を挙げられ、学界にも大きく裨益された。

本年(2022年)の3月末日をもってのご定年は、歴博にとって大きな損失であることは疑いない。筆者の能力では先生の抜けられた穴を埋めることは容易ではないが、先生の歴博でのご活躍に少し

---

でも近づけるよう、精進していきたいと思う。一方、ご定年により煩雑な館務から解放されることで、これから先生はご研究に専念できることと拝察する。くれぐれもお体を大事にされ、ますますのご活躍を祈念申し上げます。ありがとうございました。